

こんなこともありました。ある日、ボムさんが子どもにお菓子をあげると、その子はお菓子を持って逃げて行ってしまいました。その後のある雨の日、ピンポンと家のベルが鳴りました。出てみるとその子が出て「自分で作って持ってきたんだ。あげるね」とお菓子をくれたのです。その子はお菓子をもらってうれしかったけど、その気持ちをどう表したらいいかわからなくて逃げちゃったのかもしれない。「お菓子のおすそ分けをしたらお菓子が戻ってきた。それってしあわせをおすそ分けしたらしあわせが戻ってくる、ということだと思うんです。しあわせのおすそ分けが広がっていきってすごくしあわせなことですね」。

子どもの気持ちになって、時間をかけて丁寧に本を作る

二人が大切にしているのは、子どもと同じ目線になるということ。子どもが楽しいと思う絵本だったらきっと好きになる。そうすれば二人の伝えたいこともきっと伝わる。ボムさんはこう言います。「だって子どもの頃、先生や親にダメだって言われても言うこと聞かなかったけど、友達に言われたらそうだって思ったもん」。

絵本は子どもに言い聞かせたいことを表現したものではなくて、子どもが自由に想像をふくらませたり、自分で考えたりするものでありたい、と二人は考えています。

今構想中の絵本は、路地の奥の奥にある料理屋さんのおはなし。お客さんはなかなか来ないけど、来てくれて「おいしい」と心から思ってくれたら、お店の評判は口コミで少しずつ広がってお客さんもまた来てくれるし、新しいお客さんもきっと来てくれる。

「絵本作りは簡単ではありません。アイデアを考えるのは長い時間がかかるし、子どもたちは真剣に絵本を読みますから、がっかりさせたり落ち度のないように何度も内容を練り直します。大変です。でも私たちは子どもたちをしあわせにできる作品を作ることをしあわせだと感じています。時間はかかっても、いい作品を作り続けていきたいと思っています」。二人はそうして、自宅2階の制作スタジオで、ちゃぶ台に向かい合って日々ものがたりを育んでいます。



「バーバー」の原画はソフトバステルで。惜しげもなく見せてくださいました。原画の子カラに感動。

自宅2階にある明るい制作スタジオ。客側はオイスさん、壁側がボムさん。机の上には二人のキャラクター。

マレットファンとの出会いは?
How did you meet Maletfan?

マレットファンが開催した加藤啓子先生の絵本のワークショップに参加しました。子どもに楽しいと感じてもらうことを一番大切にしているマレットファンとは価値観も似ていて、親しくさせてもらっています。イベントでも私たちの本をよく読んでくれていて子どもたちの反応もすぐ教えてくれるんです。子どもたちの声は制作に欠かせません。

最初からファンです♪ 二人の絵本は子どもたちがリラックスして心から楽しめるもの。私たちも大好きな絵本です。売れることよりも、子どもの心を大切に思い、絵とおはなしを時間をかけて作っていて、すごいなと思います。タイ発のいい絵本をたくさん作ってほしいです。私たちもうれしいし、がんばれますから！（マレットファンのギップさん）

ボムさんとオイスさんのマレットファン（夢のたね）は？
What's your "Maletfan"?

ひとつひとつ丁寧に、いい作品を作り続けること。子どもたちのしあわせな顔が僕たちのしあわせです。